

誰もがこころよく 暮らせるまちづくり

子どもから高齢者まで、町民みんなが毎日をより快適に過ごし、西会津町での暮らしを主体的に楽しめるように。その基盤として、西会津町が注力しているインフラ整備を中心に、町の特徴的な取り組みをご紹介します。



「あつたらいいな」
「やりたいな」を、
実現しやすいまちへ。

いきいき健康 こころつながる まちづくり



集落訪問
の様子

65歳以上の高齢者の割合が47%を超える西会津町。福島県内でも高齢化が高い市町村トップ5に入っています。この町で高齢者が安心して、楽しく暮らせるように。集落支援員を務める岩橋義平さんに、取り組みや目指す未来像などを伺いました。

集落に寄り添い 町内外の人とともに、 考動する。

その人の想いを 尊重した支援を。

町内でも特に高齢化が加速している「奥川」という地域の集落支援を行っています。活動の主な内容は、高齢者の見守り。家を「軒」軒訪ねて回り、暮らしに困りごとがないか、健康に支障がないかを聞きながら、必要な場合は公的機関と連携して支援にあたっています。私が集落支援員を務めてから10年経ちますが、集落の状況も、支援のあり方も大きく変わりました。就任した当初は、集落の住民を主役としたイベントの企画運営など「集落の活性化」が大きなテーマでした。しかし、75歳以上の後期高齢者が集落人口の80パーセントを占めるようになった今、「集落の看取り」もはずせないテーマとなっています。特に冬場は、多いときで2メートルを超える積雪があり、高齢者にとっては安心して快適な住環境とは言い難いのが実状です。そうした背景から、身体が動くうちに集落を離れる高齢者もいます。その一方で、集落に住み続けたいという高齢者もいます。どの選択肢をとるにしても、その人の想いを尊重し、安心して「ここで暮らしてよかった」と思ってもらえるように寄り添いながら支える。集落支援のあり方に正解はありませんが、ここに暮らす一人ひとりと向き合いながら、その人に合った支援を心がけています。

多様な人と見出す、 集落の可能性。

集落に住む人は減っているものの、集落に関わってくれる人は年々増え続けています。いわゆる、交流人口・関係人口です。近年は特に、県内外の大学との連携が活発です。例えば、ゼミのフィールドワークの活動地として大学生を受け入れたり、遊休農地を活用した事業の立ち上げを計画したり、アート系の大学に通う学生と補助金制度を利用してアートプロジェクトを展開したり。10年前は想像もしていなかった多様な人とのつながりが、県内外に広がっています。そうした「若いチカラ」や「外の視点」を活かした集落支援は、集落を訪れた人にとって新しい気づきや学びとなり、集落で暮らしている高齢者にとっても刺激になる。これまでの集落にはなかった勢いが新しい人を呼び、その人たちがまた新しい人を呼んでくれる好循環が生まれているんです。集落の人口は減り続けていく。でも、ここに関わってくれる人たちが増えれば、別の形で集落を発展させていけるかもしれない。その可能性に私自身がわくわくしながら、町内外の人とともに集落プロジェクトを起こしていきたいです。

もっと便利、もっと早く。

Aーオンデマンドバス

西会津町では、生活の足を確保するために町民バスを運行しています。中でも、デマンドバスは町内全域を運行区域とし、これまで電話による予約でしたが、専用アプリの導入によりスマホなどからも予約できるようになりました。アプリでの予約は簡単なおえ、バスの現在地や到着予定時刻を見ることができ、何時にバス停で待つていばいいの一目瞭然です。さらに、バーチャルバス停（現地に標柱のないバス停）を新たに設置し、町内に300箇所以上の停留所を置くことでバス停までの移動負担を軽減。また、A（人工知能）がバスの運行ルートやダイヤを自動作成するため、より効率的な配車や運行が可能になります。2021年11月から実証運行を開始し、2022年4月から本格運行に踏み出します。

町をつなぐ情報基盤

ケーブルテレビ

西会津町では高齢者の健康管理を目的として、平成9年2月に福島県内で初めてケーブルテレビ局を開局。以来、県内に先駆けてICTを活用したまちづくりに取り組んできました。平成15年12月にはイン

町民の想いをかたちに にぎわい番所「ぷらっと」



ターネットサービスを開始、平成20年から平成23年には伝送路の光ファイバー化を行い、現在は町内全域に超高速大容量のインターネット環境が整備されています。新型コロナウイルスが蔓延し、西会津小学校・中学校が休業となった際には、ケーブルテレビを通してオンライン授業が実施されるなど、町民の暮らしを支える情報基盤として活用されています。

野沢まちなかにある空き店舗・民家を利用し、令和3年度にリノベーション整備した「にぎわい番所ぷらっと」。テレワークスペースやキITCHンスペース、和室などがあり、さまざまな用途で利用可能です。これまでに、町民による会議やイベントなどが行われており、町民主体のにぎわいづくりを目指しています。